《海外研究室事情(12)》

Institute of Astronomy, University of Cambridge

ケンブリッジ大学天文学研究所

http://www.ast.cam.ac.uk/

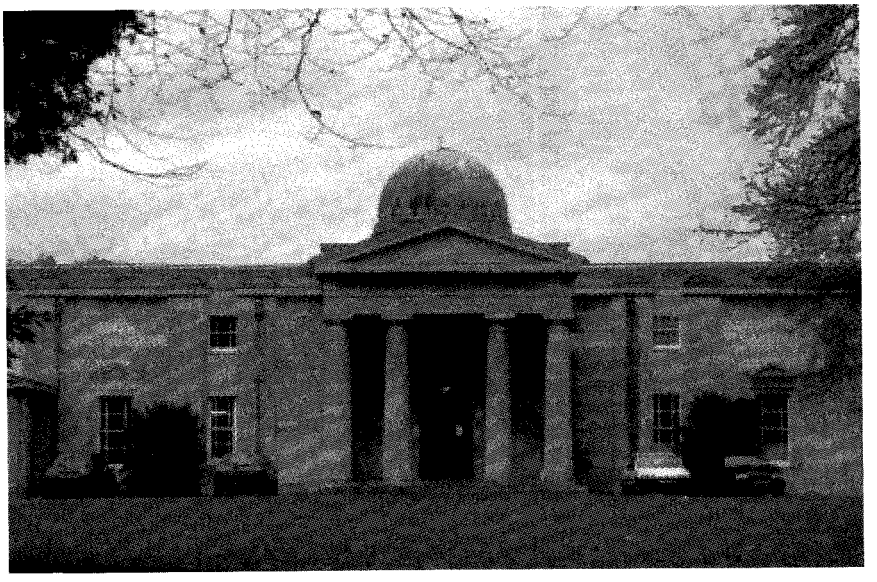
ロンドンからおよそ60マイル，ロンドンの北東に広がるイースト・アングリア地方のほぼ中央に，ケンブリッジの町はある．この川のほとりの小さな田舎町に13世紀初め，オックスフォードの大学・住民間の抗争を逃れてやって来た人々が作った学校が，現在のケンブリッジ大学の始まりである．

私がこのケンブリッジの地を踏んだのは1990年のある秋の日のことであった．ケンブリッジ大学の天文学研究所（Institute of Astronomy，略称IoA）の研究員として着任したのである．最初は2年間の予定だったのだが，あれよあれよと言う間に時は流れて，この3月に東京へ戻って来る頃までには，既に9年半の歳月が経っていた．この間，私はダグラス・ゴーフ（Goughという姓の発音はイギリス英語では「ゴーフ」に近い）の率いる日震学のグループに属し，主としてGONG計画や科学衛星SOHOのデータを使って，太陽振動から内部構造を探る研究に従事していた．本稿はその時の経験によっているが，写真は昨年10月からグループに加わった，高田将郎君に送って貰ったものである．ここに感謝する．

ケンブリッジ郊外にあって長い歴史を持つ大学天文台と，元は政府機関だった太陽物理天文台．ここに，1967年に出来たばかりの理論天文学研究所を加えた3つの組織が合体し，IoAが出来たのは1972年である．だからIoAとしての歴史は意外に浅い．現在のIoAはスタッフ・学生に長期滞在者を合わせて総勢120名から130名といったところか．一つ一つ挙げることはしないが，理論・観測を問わず幅広い分野をカバーしている（興味のある方はhttp://www.ast.cam.ac.uk/を御覧になるとよい）．世界中から研究者が集まって来るだけあって，国際色は非常に豊かで，研究グループによってはイギリス人を探すのに苦労することさえある．私が属していた日震学のグループが正にそうで，ボス以外は全員が外国人，という時期もあった．大学院生のレベルだと，通常はおよそ半数がイギリス人である．大学院生も，学部生と同様カレッジに属しながら，研究所で教育を受ける．

ケンブリッジにいて一番面倒だったのが，日本からやって来る客に，このカレッジ制を説明しなくてはならないことであった．世のガイドブックやケンブリッジ滞在記では「要するに寮の様なものだ」と書いてあることが多いが，実際にはカレッジとはそれぞれが本来独立した（独立していた，独立し得る）全寮制の学校であり，その全寮制学校の複合体がケンブリッジ大学である，と考えれば歴史的にも一番真実に近いと思われる．学生達はカレッジに属しながら，複合体のいわば共通インフラである「学科」や「研究所」に派遣されて，そこで勉強するわけだ．

ケンブリッジ大学では，一学期は8週間と決まっている．短い様だが，この8週間の間は一科目につき週2～3回の講義があり，土曜はおろか祝日があっても強行してしまうので，講義する側の家族には評判が悪い．ポスドクのレベルでも，大学院レベルの講義を受け持つことがあり，私も星の脈動の講義を受け持ったことがあるが，結構キツかった．その代わり，この8週間が終れ



元 University Observatory の建物．重要建造物の指定を受けている．向かって右奥の一角はかつて台長の居住区画になっていた．

（高田将郎氏撮影）

ば学生達は更に猛勉強するもよし，世界を旅して見聞を広めるもよし．また，教える側は研究に没頭出来る・・・わけでもないのは雑用があるからで，これは多かれ少なかれどこの国でも同じであろう．従って「偉い」研究者程，週末や早朝・深夜に研究所に出没することになる．

朝は9時頃をメドに人が集まり出し，11時にモーニング・コーヒーがある．IoA のコーヒーは，私の知る限りでは世界一まずいのだが，このまずいコーヒーを飲みながら，世間話をしたり研究上の情報交換や議論をしたりするのが習慣になっている．私が着任した90年頃だと，IoA もまだ総勢70名といったところで，これだと訪問者も含めてお互いにほぼ全員の出入りが把握出来る．コーヒータイムに知らない顔を見つけると，これは新顔だとわかるから，わざわざ近づいていって挨拶し，話を始めるということがよくあった．最近では人数が多過ぎて，最初から知合い同士のグループで固まってしまうことが多くなったのは（そのこと自体は自然だが）残念である．それでも，このコーヒータイムは気軽に人を捕まえるのに便利だし，また誰かが賞を貰ったり，昇進したり，誕生日を迎えたり，またいよいよ退職を迎える時にも，インフォーマルなセレモニーの場と化す．

IoA の最大の特色は，訪れる研究者の多さであろう．常に色々な分野の研究者が，色々な国からやって来ている．特に夏は物凄く，数年前にオフィスを増やす迄は，机の分配に困る程であった．訪れる人が多いのは，IoA のレベルの高さ故であるとともに，そのレベルを保つ助けにもなっている．また，大事なことであるが，このことはきちんと認識もされている様だ．

写真は大学天文台の建物を，正面から見たところである．ドームの中は，現在は空っぽ．コリント様式の柱の並ぶ玄関の右に，図書室の窓が見える．右奥の一角は，以前は天文台長の居住区域になっていた．ここで，かつてアーサー・エディントンを訪れたアインシュタインが，ヴァイオリンを弾いて見せたという．

関井　隆（国立天文台）